部署は対応できないので、利息や振込先に関する回答はできないと云われる。その他訊きたいこともあり、結局10分ほど話し込んでしまった。

電話が終わると6時になっていた。読書にも倦んだのでシャワーを浴びてから晩酌にする。ところがシャワー設備の水栓等は申し分ないものが使われているのに、シャワーカーテンなどはない。気をつけて使っても所詮無駄な抵抗で、便器の廻りまで水浸しになる。ブルガリアの人は不愉快に感じたり不便と思わないのだろうか。

晩酌にいささかツマミが不足に感じられた。昼間食指の動いたドネルケバブは、スタンド式の売店が宿のすぐそばにも一つある。これをツマミに加えるべく出かけた。

ドネルケバブ2個。

ブルガリアのドネルケバブは、イスタンブルのものに比べると、フライドポテトなどが付け合わされているのが違いだが、そんなことは気にせず購入。2個で1.5Lv(82円)だ。

ついでに昨日酒を買った店でミルクを探す。見付からないので英語を喋る店員がいたから訊いてみる。ミルクはなく、似たような(？)飲み物ならば液体ヨーグルトがあると云のでそれを買った。400cc脂肪分1.5%のものが1.7Lv(93円)。レシートにはケフィア・カチューシャと書かれていた。

宿の周りは昼間でも車輌の往来が少ないのに夜はさらに減り、その静けさ故に、この晩も空調の騒音ばかりが際だった。皮肉なものだ。

４．ネセバル(Несебър)

路線バス

11月3日も晴れだった。8時半に朝食堂で簡単な朝食を取る。閑散とした食堂だったが、二人いた女性スタッフの一人がタバコを吸い始める。一応室内禁煙のルールはあるらしいので、彼女は表に通じるガラスドアを開けると、そこで煙草をふかしている。

外気温は5℃くらいだったので、外からは冷気とそしてタバコの煙が室内へ流れ込む。不愉快なので抗議しようかとも思ったが、昨晩の葉巻などもあり、この国では許されるのかと様子見した。その後旅を続け、度々商店のドアを開け、ドア框の上でタバコを吸っている人を見かけた。これが一般的らしい。

路線バスの車内。前方の赤いジャケット姿は（日本では久しい以前に死語となった）バスガール。

10時10分のネセヴァル行きバスに乗ろうと、10時ちょっと前にチェックアウトする。フロントにいたのは相変わらず同じ彼女だ。

二泊の勘定は110Lv(6,041円)で、カードで支払う。この勘定とは別に細長い紙切れを渡され、電話代だという。KDDIの番号や、00:09:23（通話時間？）などが印字され、料金は19.95Lv(1,096円)だった。

「この番号ならばフリーダイアルのはず。」と抗議しても、ホテルのシステムが課金する以上譲れないらしい。それでもなぜか10Lv(549円)に負けてくれた。大した金額ではないし、論争しても始まるまいと、現金で支払う。

気温は低めだが、秋の陽射しを浴び風もない状態で歩くのは心地良い。下見済みのバス停に至り、そばに切符売り場があったので訊くと、車内で買ってくれと云われた。

バスを待つ間にもタクシー運転手が客引きに来る。しかしそれほどしつこいわけでもなく、どちらかというと手持ちぶさたの退屈しのぎみたいだ。定刻5分前にバスが到着した。座席は中央通路の左右に二列ずつで40席ほどだろうか。地元の人が5、6人乗り込むのを待ち、最後に乗車した。

このバスには、（日本では死語になってしまった）バスガールが乗車している。そこで前日にホテルを電話予約した際、フロント嬢（オバサン）が書いてくれた宿情報（名前や住所）を見せて、此処に泊まりたいので然るべき場所で教えて欲しいと頼んだ。

英語がどの程度通じたのか不明だけれど、ともかく彼女はうけがってくれた。ついでに切符を買おうとして料金は5Lv(35キロで275円)とのことで財布から札を出す。ところが彼女に、クスクス笑いながら、「それはユーロだ。」と云う。

ソフィアの二日目に、ユーロは通常使用の財布から全部取り出したつもりで、手抜かりがあったわけだ。いわゆる「脇が甘い」状態だと思う。これ自体は取るに足りないミスだけれど、積み重なれば大事になるかもしれない。自戒すべし。

右側に断続的に黒海を見ながら行く。そのうち大規模リゾートホテルがひしめき合う聚落があった。後ほど英ガイドで調べるとポモリエで、ブルガリア人には大人気のリゾートらしい。

上：道路は空いているし幅は充分でカーブが少なく見通しも良い。下：右手には黒海沿岸風景が断続し、塩田も見えた。

GPSで移動距離を見て、そろそろネセバルだろうと思っていると、道標で確認できた。荷物をまとめ身構えていたら、間もなく市街地に入り数分で停車する。

「此処か？」と身振りで車掌に尋ね、下車した。降りるとき彼女が進むべき方向を教えてくれたものの、バスが去った後、落ち着いてホテルらしきものを探しても見える範囲にはない。

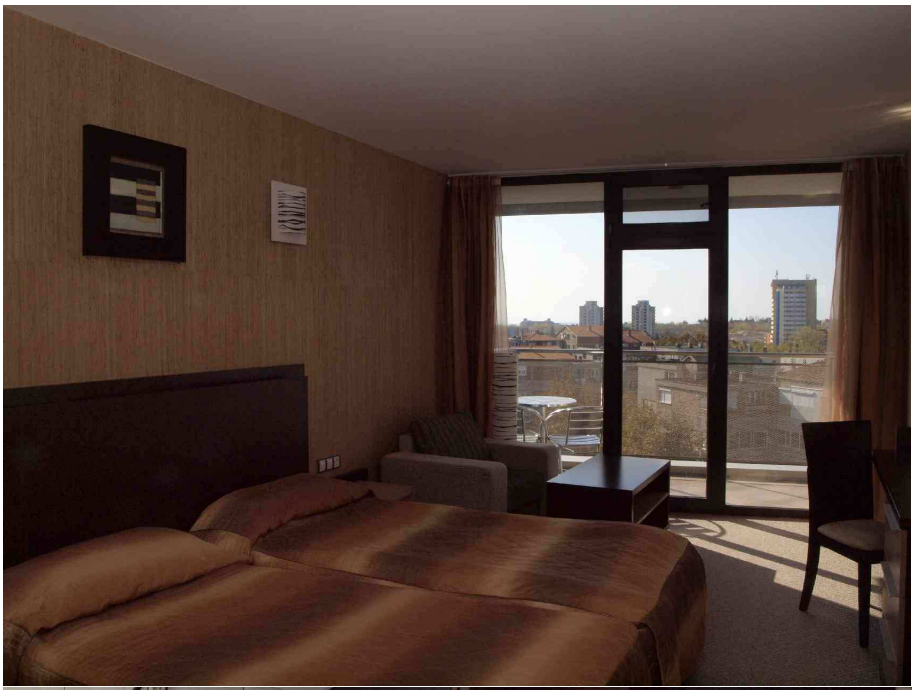
こんな時は一人でじたばたするよりも訊くに限ると思っている。そばにビルがあり、人の出入りが多いのでそこへ入った。カメラやビデオを持ったプロ風の男が大勢いて、何となく記者会見場を思わせる雰囲気だ。案内係風の女性がいたので、彼女に尋ねた。

昨晩電話予約して貰ったとき受け取ったホテル名などが書かれた紙片を見せる。彼女はうなずき、先に立って街路まで行き、「あの角を左に曲がれば．．．．」と教えてくれた。10センチ以上ありそうなピンヒールを履き、美人だけれど化粧も濃く派手な感じに対して抱いた先入観とは随分違う、気さくで親切な人だった。

もう一度、八百屋で訊くとすぐ斜め向かいだったので、若干照れ臭く思う。しかし旅の恥はかき捨て。ついでに云えば、書いたものを用意しておくのがこのような問い合わせを円滑にするコツだ。

道路を斜めに渡って玄関へ。看板を見ると四つ星だ。中に入ると確かにそれらしく豪奢で広々したロビーだが、閑散としている。部屋を下見させて貰ったが、505号室は6階の南西向きで不満な点は何もなかった。取り敢えず二泊しよう。

フロントへ戻りチェックイン。荷物を運び込み、改めて部屋をじっくり検分する。ベランダは見晴らしが良く、椅子、テーブルがあるのでもう少し暖かい時期ならばさらに良かったのにと思う。



上：マリエッタパレスの泊まった部屋とそこからの景観。下左：シャワー装置。下右：洗面台の水栓。金属リングの角度で水量と冷暖を調整できる。

部屋の広さは12畳くらいあり充分。一人だから6畳くらいでも良いわけだが、やはりこの程度広々していると豊かな気分になる。ソフィア、ブルガス、此処と移動するに従い広くなった。

冷蔵庫あり。ヨーロッパではなしが一般的だけれど、ブルガリアでは三ヶ所連続でありだから、これが標準なのかもしれない。

浴室は広いし設備的にも良い。シャワーも透明な仕切りと引き戸で仕切られ、化粧室全体の床を水浸しにするようなこともない。しかしシャワー装置や洗面台水栓などは過剰な設備あるいはデザインといったものを感じる。しかしこれがブルガリア人の好みなのかもしれない。

ネセバル新・旧市街平面図　　0 ━ 200m

新市街の東端部から旧市街を望む。

旧市街探訪（1）

検分しつつ一休みできたので、移動気分から探訪気分に切り替えて旧市街へ向かう。フロントで訊くと、ホテル前を右へ行けば、道なりで旧市街へ辿り着くらしい。時刻は11時半なので、向こうで適当な店を探し昼飯にするつもりだ。

旧市街へ通じる道は、両側に歩道のある相互一車線道路だが、交通量は少ない。沿道には商店や飲食店が、住宅と混在している。ネセバルは人口1万ちょっとの街で、交通の要衝というわけでもないから、繁華街と云えそうなところはないらしい。

10分ほどで視界が開け、前方に旧市街が見える。街の歴史は古く、発祥はB.C.10ごろまで遡るらしい。

地盤沈下により往時の街は三割程度が水没し、橋かと見まごうような地峡により本土と繋がっている。実のところ橋と云っても良いのかもしれない。かつては島であった旧市街を、人工的盛り土で本土と連結したそうだ。

旧市街の南西部は埠頭になっていて、おりしも数千噸のクルーズ船が接岸していた。このクラスだと100名ぐらいが乗客定員らしい。現在島内観光中か。

地中海からダーダネルス海峡、ボスポラス海峡を通過して来航したのだろう。観光資源に富んでいて、魅力的なコースだ。もっとも船上での生活を考えると、私としては金を貰っても乗りたいとは思わない。

地峡の中ほどに、19世紀の風車。

地峡を渡りきったところで、露天の魚屋が商いをしていた。観光客が生魚を買うは

地峡を渡りきったところに魚屋。прясна рибаが鮮魚。маринована рибаが味付き魚。

ネセバル旧市街衛星写真　0 ——— 200m

ずもない。ならば島の港に上がった魚をネセバル市民相手に売るのだろうか。それにしては交通が不便すぎるようにも思われた。

閑話休題。魚屋の付近がちょっとした広場になっていて、バスの停留所もある。先ほど乗ってきたブルガスからのバスは此処が終点らしいし、次の目的地ヴァルナ行きにも乗れそうだ。

バス停の後ろが西門で、かつて旧市街を囲んでいた城壁の一部だ。しかし城壁の崩壊は激しく、この辺りは復元工事によりそれらしい形が見えるものの、他では「壁」らしいものをほとんど見ることができない。

旧市街の背骨とも云えそうなメセンブリア通りを東へ向かう。古い木造建築が建ち並んでいるが、沿道の建物はほとんど土産物屋か飲食店など、観光客相手の店となり、そしてシーズンオフのせいか、半分くらいは閉まっていた。

メセンブリア通り沿道。観光客相手の店が連なるものの半数は閉店。

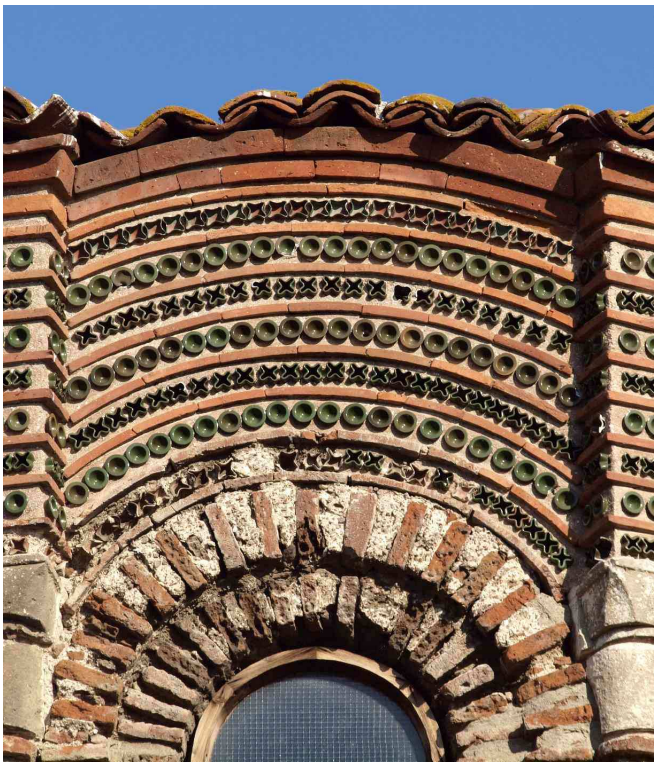
俗説らしいがネセバルは、「面積あたりの聖堂の数が最も多い街」と称されることがある。現在も教会として機能しているのは一つだけだが、廃墟になっていてもその形がはっきり見てとれるものまで入れれば10ヶ所ある。島の面積は約31ヘクタール（93,775坪）だから3ヘクタール（170メートル四方：9千坪）に1教会と云うことになる。

間もなくちょっとした広場があり、これと相対するように古めかしい教会があった。パントクラトール（ギリシャ語：全能者）教会だ。

パントクラトール教会。

14世紀の創建で旧市街に残る教会遺跡の中では保存状態がよい。現在はアートギャラリーとして使用されている（日ガイド）とのことだけれど、シーズンオフのせいか入り口は施錠されていた。

しばらく教会の周りを経巡る。これまで目にしたことのない建築様式だ。建設されたのはトルコ支配下以前だから、ビザンチンの影響は



パントクラトール教会。彩色陶器の装飾を拡大撮影。

あるかもしれないが、イスタンブルやイタリアのラヴェンナなどで、こんな感じの建物を見た記憶はない。やはりトラキア風と云うかブルガリア風なのだろう。

レンガの赤、灰色の砂岩（？）、さらに白い大理石（？）と緑色や黄緑色の装飾用彩色陶器の織りなすカラフルな外観は門外漢が見てもユニークだし、美しいと思う。

ただ緑色の彩色陶器を、その形状や色合いから、ワインボトルが横に埋め込んであるのを、ボトルの底側から見ているように感じるのは私だけの偏見だろうか。

どうも考えることのレベルが低いのは、やはり教養のないせいなのか。ともかくメセンブリア通り東進を再開した。3、4分で通りは終わるが、行き止まりではない。木造二階建ての民家が軒を接して並ぶ間を、錯綜した径が迷路のように繋がっていた。

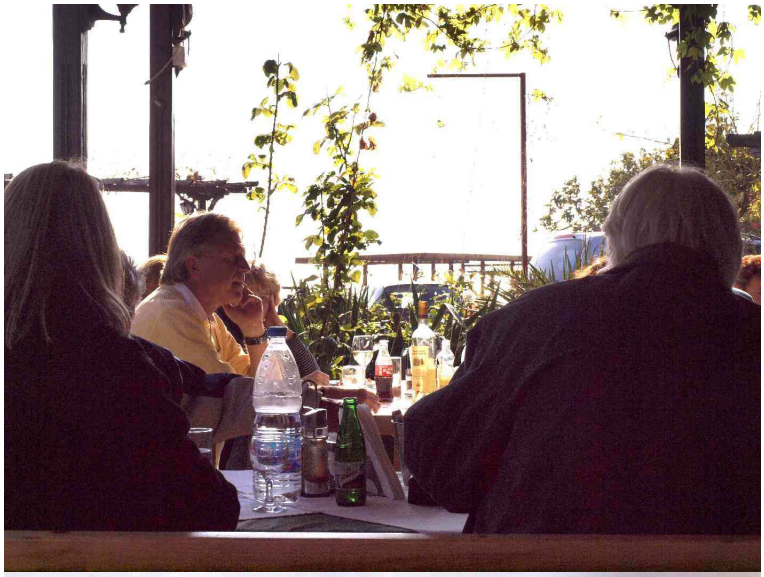
狭い島の中だから、迷子になる心配もない。適当に雰囲気の良さそうな道を拾って歩いた。次第に島の東端部に近付き、少し家々の間隔が広がって、村外れの感じがする。

旧市街を網羅的に歩くつもりもあったが、こちらまで来た直接の目的は、英ガイドの特にお奨めレストラン、メハナ・ププリ・ショピテを探していた。

ちなみにメハナ（Механа）は食堂あるいは居酒屋などを意味するらしい。はじめのうちはそれが判らず、固有名詞の一部かと思っていた。そのうち読めないながらもキリル文字に馴染んでくると、食堂の看板にМеханаがやたら多いことに気付き、ようやくその意味が判った。発音はほぼ「目鼻」でよいから、老化と共に物覚えが悪くなっていても、これだけはすぐ記憶できた。

閑話休題。英文ガイドの地図を度々参照しながらププリ・ショピテを丹念に探したが見付からない。多分休業中か廃業したのだろう。しかしこの辺りで快適そうなテラス席ありのメハナを見付けた。屋内は覗いてみるとタバコの匂いがしたし、一方表は風もなく気温も頃合いだったのでレストラン・タングラのテラスで昼飯にする。

英文併記お品書きを渡され、時間を掛けて（その割には平々凡々の）ミックスサラダ、トマトスープ、鱒のグリルを選ぶ。ワインは全てブルガリア産とのことで、シャルドネ種（白）にした。



上：レストラン・タングラのテラス席。下：ミックスサラダ。

トマトスープ。

ワインはすぐに出された。さっぱりして飲みやすい。次いでミックスサラダが運ばれてくる。粗切りにした胡瓜とトマトにオリーブの実とイタリアンパセリが添えられているだけで、塩、酢、オリーブオイルは各自が好みで調味するから、ほとんど料理とも云えないようなものだ。

これがミックスサラダの標準だから文句の着けようもないものの、つまらない選択だったと思う。ショプスカサラダの方が面白い。

鱒のグリル。

しかし別に不味かったわけではないので順調に食べ進める。トマトスープも登場。これも普通に美味かったが、スープをスプーンですくって口に運ぶのは、汁物を飲んだ気分にならずストレスが溜まる。周囲の視線がないと思ったとき、カップを持ってゴクリとやる。しかし人目を忍んでも往々にして誰かが見ているものだが、それも、「旅の恥はかき捨て。」だろうと居直る。

スープの後に15分ほど間隔が空き、いよいよメインの鱒が運ばれてきた。見た目はちょっと焼きすぎのようだ。持参してきた箸を取り出し、食べ始める。

オリーブオイルをたっぷりかけて、オーブン使用したものなのか、ちょっと蒸し焼き加減のような気もするが、味は佳かった。ワインとの相性も良好だ。ゆっくりマイペースで食べ進め、1時間ほどで昼食を終える。

勘定は、サラダ3.2Lv(176円)、スープ2.5Lv(137円)、鱒10.5Lv(577円)、ワイン14Lv(769円)、サービス料10%3Lv(165円)だった。

大天使ミカエル・ガブリエル教会。

来るときは島の南側を歩いたので、北側を通って帰る。ブルガスの宿で電話をかけて貰ったものの泊まれなかったトニーがあり、なるほど休業中だった。

食事前に見た教会はパントクラトールだけだったので、帰り道はもう少しあれこれ見る。先ず聖パラスケヴァ、そして並ぶようなところにある大天使ミカエル・ガブリエル教会。

洗礼者ヨハネ教会。

（多分）半野良猫だが、毛並みも良く餌はそれなりに貰っているのだろう。ブルガリアでは野良猫、野良犬が多いけれど、皆わりに状態がよい。人間と上手く共存できているならば、羨ましいことだ。

次いで聖スパス教会と洗礼者ヨハネ教会。どの教会も今や信仰の場ではなくなり、その意味で現役は聖ボゴロディツァ教会がただ一つある。しかしこれは19世紀創建で、見る対象としては誠につまらない。

祈りの場ではなくなった建物で、廃墟になっているものは出入り自由だ。それに対し、構造が比較的良く残っているものはギャラリーなどに使われているらしい。しかし、その類はいずれもシーズンオフのためか施錠されていた。

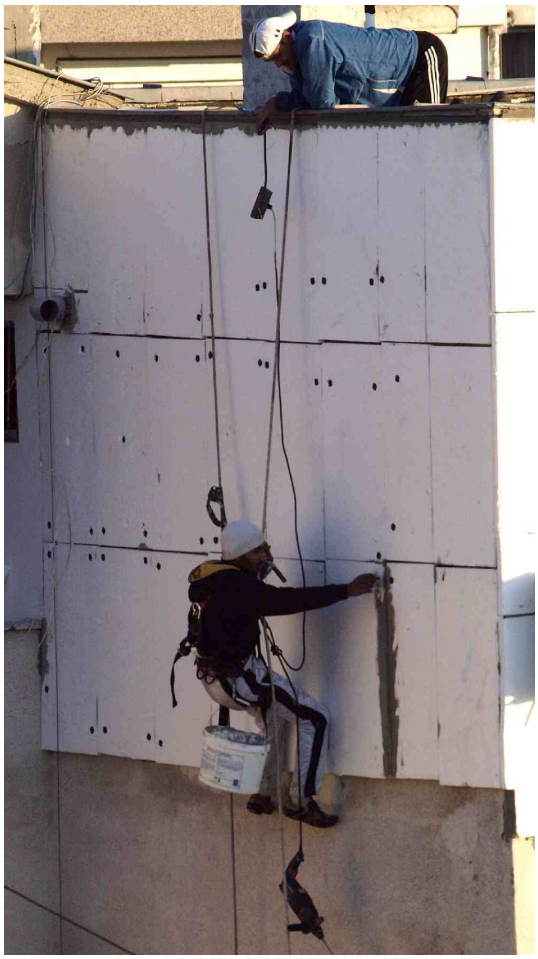
ところで洗礼者ヨハネの日本正教会による呼称は、「前駆授洗イオアン」だ。ブルガリアは東方正教会系だから、用語も（日本ハリストス）正教会のものを使用すべきかとも思った。しかし、「前駆授洗」などは日本語として異様な感じがするし、イオアンとヨハネが同一人物を示すことも判らなくなる。さらに云えば翻訳するとき、宗教宗派がそれにかかわる必然性などなく、それよりも日本語として自然であるべきだと思う。

閑話休題。教会巡りをしたと云っても、仔細に見たわけでもないし、内部に立ち入ることもできなかったので、半時間もかからぬうちに一通り見て廻り、この日はこれで旧市街から帰ることにした。

宿に戻り着いたのは3時近かった。まだ暮れるまでにはたっぷり時間があり、くたびれていたわけでもなかったが、再度外出はしなかった。ネセバルには二泊するつもりなので先を急ぐ必要は無い。そして部屋の居心地は一応四つ星だけのことはある。

ロビーに一台だけ、インターネットにアクセスできるPCがあった。コイン式で1Lv(55円)入れると15分アクセスできる。試してみると日本語も表示できるので、メールを読んだり、旅の情報収集で半時間ほど利用した。

これで110円だから、日本の感覚では格安なれど、ブルガリア値段では法外な高値とは、しばらく後になって判った。しかし額が僅かなので腹が立たないのはソフィアのタクシーと同じ事だ。



外壁の外断熱工事。

部屋に戻って持参した、「隠れていた宇宙」を読む。上下二冊のハードカバーで、それぞれ300ページ以上の大部だし、おまけに私の物理学理解力では難解だから、一月の旅でも充分持つはずと見込んでいる。

面白い本ではあるが、2時間も読んでいるとさすがにくたびれる。気分転換にベランダに出てみた。風もなく、空気は澄んで気持ち良い。これで海が見えれば申し分ないけれど、残念ながら視界には低層住宅と、所々にビルがあるのは集合住宅かホテルらしい。

ちょうど100メートルくらい南の6階建て集合住宅で、外壁を工事中だった。足場を全く組まないで仕事をしている。日本ならばビルの窓ガラス拭きがほぼ同じ作業形態だろう。建築は門外漢なので、日本でもこのようなやり方は珍しくないのかもしれないが、目撃した経験はない。

この施工法による利点は、まず安価なことだ。外断熱工事では足場の費用が半分くらいを占めるようだから、大幅なコストダウンになるし、足場の組み立て、解体用地が全部不要になる。さらに、例えば5階部分の所有者だけが外断熱を望んでも、足場ならば下から組まなければならないのに、ぶら下がり方式ならばその階だけを対象にできる。

しかし軽量な断熱パネルの貼り付けはともかく、表面仕上げをする際にはかなり手こずりそうな気もする。日本で見かけないのはその辺りに理由があるのかもしれない。しかし興味深かったので、望遠系ズームレンズを使用し、施工状況を数枚撮影した。

5時頃買い物に出かける。宿のすぐ隣が大型スーパーマーケットだった。買ったのはポテトチップス0.92Lv(51円)、ミルク1ﾘｯﾄﾙ2Lv(110円)、ミネラルウォーター500cc0.39Lv(21円)、グレープフルーツジュース2ﾘｯﾄﾙ4.74Lv(260円)、ウォッカ(Alaska)1ﾘｯﾄﾙ11.22Lv(616円)など。水を割高な少量ペットボトルで買ったのは持ち歩き用ということと、飲み口がスポーツタイプ(スクリューキャップではなく、歩行中などに飲みやすい型)のものを入手し、日本へ持ち帰りたかったためだ。

スポーツタイプのキャップ(飲み口)。

スーパーを出て、宿への帰路にある八百屋へ寄った。先ほどホテルへの道を訊いた店だ。トマト一個を0.16Lv(9円)で買う。これは店先に置かれていたもので、かなり傷んだものも多い。買ってから気付いたが、投げ売りの品で、店内にはもっと良質なものがあった。もちろんそちらの方が高い。

部屋に戻る頃には辺りはとっぷり暮れ、西の空に残照が見えるのみだ。そんな風景を眺めながらの晩酌は、いつもそうだけれど何か豊かな気分になれる。

旧市街探訪（2）

11月4日も好天気が続いている。6階の見晴らしがよい部屋で、こんな朝を迎えると爽快な気分になる。1階の食堂が開くのを待って8時半に朝食へ降りた。

ビュッフェ方式の設備はされているが、シーズンオフは個別に対応で、確かに数人だけの客しか利用しないのに、ビュッフェに多種の料理を並べるのは無駄が多すぎる。しかし個別に選択できる料理の品数は少なく、ミルクコーヒーと注文してもたらされたものはインスタントだったから、ホテルのグレードを疑う気持ちが生じた。

簡素な朝食を食べていると、猫が食堂に入ってきた。飼い猫なのか野良が忍び込んだか判らないが、これも四つ星ホテルにはあるまじきことと思う。

朝食を済ませ、エレベーターで部屋へ戻る。このエレベーターは昇降動作中ダイナミックにイルミネーションが変わるなども、かつて見たことがない豪華さを演出する。しかしそれでいて停止しドアが開くとエレベーターの内外で、僅かながら段差がある。この宿が見かけ倒しであるとの印象が強まった。

6階で部屋へ入る前に廊下を先の方まで行ってみると、一部だけれど天井に雨漏りの染みがある。もっともこれは7階にプールがあるらしいので、そこからの漏水かもしれないが、いずれにしても見苦しい。

さらに部屋のレースカーテンは劣化していて、ちょっとした力がかかると裂けてしまうことや、ロビーをホテルのスタッフが咥えタバコで歩き廻っていたことなどを合わせ、四つ星であるにせよお粗末な宿だと結論づける。しかしこれも料金が一泊3,295円なのだから、仕方ないのかもしれない。

この日は9時半に出かけた。昨日は見物よりも食事が主たる目的で旧市街まで行ったようなものだったので、今日はもう少し真面目に見るつもりだ。ちなみにネセバル旧市街はユネスコ世界遺産として、1983年に登録されている。登録理由は、「文化的伝統や文明の稀少な証拠」と「歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積」だそうだ。

昨日ブルガスからのバスを降りたところまで行き、バス路線を歩いてみる。休業中らしいリゾートホテルを路傍に見ながら,それ以上なんの収穫もないまま島へ渡る地峡に至った。

北を見ると湾岸はびっしり隙間なくリゾートホテルが建ち並んでいる。サニービーチから連なり、海浜リゾートとしてはブルガリアで最大だ。数キロ離れていても、華やいだ雰囲気が伝わってくる。

地峡を渡り終え、昨日はほぼ素通りした西門から見直して行く。観光客はまだおらず、近所のオバサンがコーヒーカップを片手に、携帯電話で長話をしていた。

修復された旧市街西門。

聖ステファン教会。

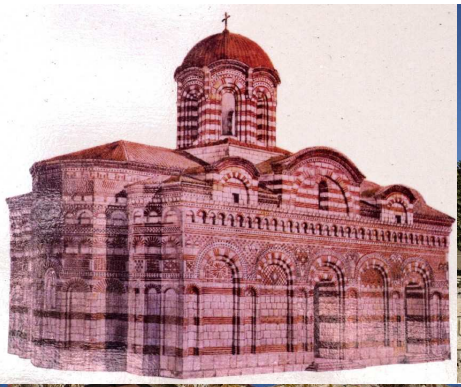
西門に隣接して考古学博物館がある。ネセバルはB.C.10世紀辺りにトラキア人により拓かれ、以後ギリシャやローマの都市となった歴史があり、博物館の収蔵品もそれぞれの時代に対応しているらしい。日ガイドには、「なかなか見ごたえがある。」とのことだが、博物館は後回しにした。

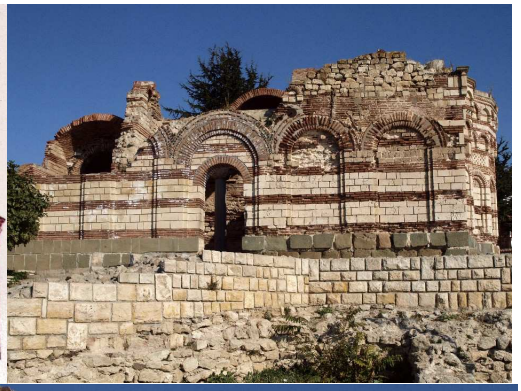
昨日同様メインストリートを行って、パントクラトール教会を再見。旧市街の教会群中では比較的新しく(14世紀創建)、損傷も少ない上、レンガや彩色陶器の織りなすパターンが美しいので、数回周囲を回りながら眺めた。この日も扉は施錠されており、内部を見ることはできない。

教会前の路地を南へ行くと、壁画で有名(日ガイド)な聖ステファン教会がある。しかし此処は教会を囲んで石塀があり、門扉が閉ざされていたので近付くことさえできなかった。

そのさらに南側で、海原を見下ろすようにして建っているのが、聖ヨハネ・アリトゥルゲトゥス教会だ。14世紀に建設されたものの、教会としては使用されなかった。そのためアリトゥルゲトゥス(ギリシャ語で「神に捧げられなかった」)と呼ばれている。

その理由として伝説によれば、「建設中に男が墜落死したため、教会の戒律から礼拝に相応しくない場所とされた。」と英語版ウィキペディアに書かれている。しかしさらに、「ある記録によれば礼拝が執り行われた」の記述が続き、こうなるとなぜアリトゥルゲトゥスと呼ばれるようになったのかさっぱり判らなくなる。





さらに1913年の大地震で上部はほとんど破壊されてしまった。しかし残存部分の白い切石と漆喰や赤レンガ、緑の彩色陶器を使用したパターンの美しさはネセバル中世教会の中でも第一級で、先ほどのパントクラトール教会と共に、ネセバルで人気のある場所となっている。それなのにシーズンオフのためか誰もいない。二

上左:アリトゥルゲトゥス教会の案内板に描かれた復元図。上右:南側からの外観。下:南東面。

各家が一冬分の薪を用意するのは、ブルガリア晩秋の風物詩と云えるだろう。

洗礼者ヨハネ教会。

周ほどして15枚撮影。

海辺から島脊梁部のメセンブリア通りへ戻り、再びパントクラトール教会を撮影する。光線の加減が変わったのと、背景になる青空の深みが増したように感じられたせいだ。

野良犬。おとなしい子だった。

メセンブリア通りから分岐し、北側を平行するミトロボリツカ通りへ歩みを進める。昨日も見た洗礼者ヨハネ教会だが、朝日を浴びてすっきりした姿に見えた。ところがいざ撮影しようとカメラを構えた途端に、構図が台無しになるようなところに乗用車が駐まった。

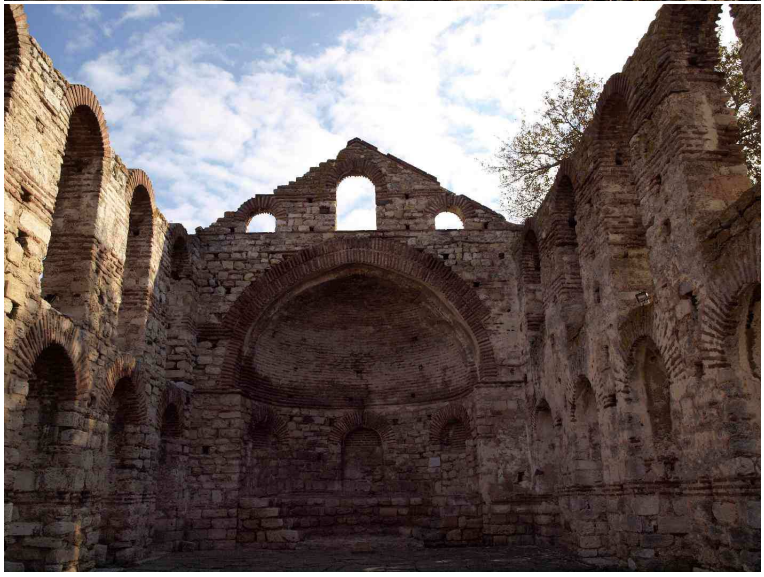
教会と通りを挟んで向かい合う位置にある土産物屋が商品を運んできたらしい。「どいてくれ。」とも云えないので仕方なく待つ。2、3分のことだったが、気が短いこともありジリジリさせられ、立ち去ってくれたときは清々した。

ヨハネ教会から70メートルほどで聖スパス教会がある。前者内部には聖マリナのフレスコ画、後者にはキリストの生涯を描いた壁画があると日ガイドに紹介されていたものの、どちらの扉も閉ざされ、人の気配もなかった。

スパス教会の裏で、ゴールデン・レトリバー系の野良犬と出会う。犬好きとしては仲良くしたくなるのだが、おとなしいけれどあまり人なつっこくはない。苛められたことがあるのだろうか。ともかくこの子の後をついて行くと、半地下の遺跡があった。ビザンチンの浴場遺跡だ。

英ガイドによると効能に定評のある温泉で、この地方最大だったらしい。しかし812年に第一次ブルガリア帝国の二代目皇帝クルムの侵略戦争で破壊され、そのまま廃墟となっている。

浴場遺跡から100メートルほどのところに聖ソ



上：洗礼者ヨハネ教会そばにあるビザンチンの浴場遺跡。下：聖ソフィア教会。

聖ソフィア教会の側廊と身廊の間に設けられたアーチ。

フィア教会の遺構がある。東ローマの皇帝ユスティニアヌス1世が建立した大規模寺院の一部であった。ソフィアは古代ギリシャで智慧が擬人化された女神象徴であり、それがキリスト教においてソピアーとなり、神の知恵を意味するらしい。それ故に最上級の教会がこの名を冠せられることも多く、ネセバル、イスタンブル、ブルガリアの首府（地名ソフィアは教会名に由来）にもあって、いずれもユスティニアヌスの建立だ。

それはさておき、当地の聖ソフィア教会もビザンチン帝国最盛期に、皇帝により作られたから、往時はその規模の壮大さと、モザイクや壁画の素晴らしさでネセバル随一だったらしい。しかし今や宗教的な雰囲気は雲散霧消している。シーズン中はコンサートなども催されるらしいが、夏の夜などに星空のもとならば随分趣がありそうだ。

土産物屋が多い。その中にほとんどランプシェードばかりを扱っている店があった。ガラス製で鮮やかな色合いが目を惹く。

値段的にはそれほど高価ではなく、一つぐらい欲しかったけれど、日本へ持ち帰ることを考えると、途端に現実的ではなくなる。以前オランダからステンドグラス製シェードの小型卓上スタンドを持ち帰ったが、帰国前日に買い求めのに足手まといになること甚だしく、壊さないようにする気苦労も大きかった。今回はこれから一月近くブルガリア国内を彷徨うのだから、なおのこと始末が悪い。

記録として1枚ぐらい画像を残したかったが、店内には撮影お断りの貼り紙がある。諦めて踵を返そうとしたとき、店頭に飾られたピアスが土産物になりそうだと思う。綺麗で、壊れないし嵩張らない。

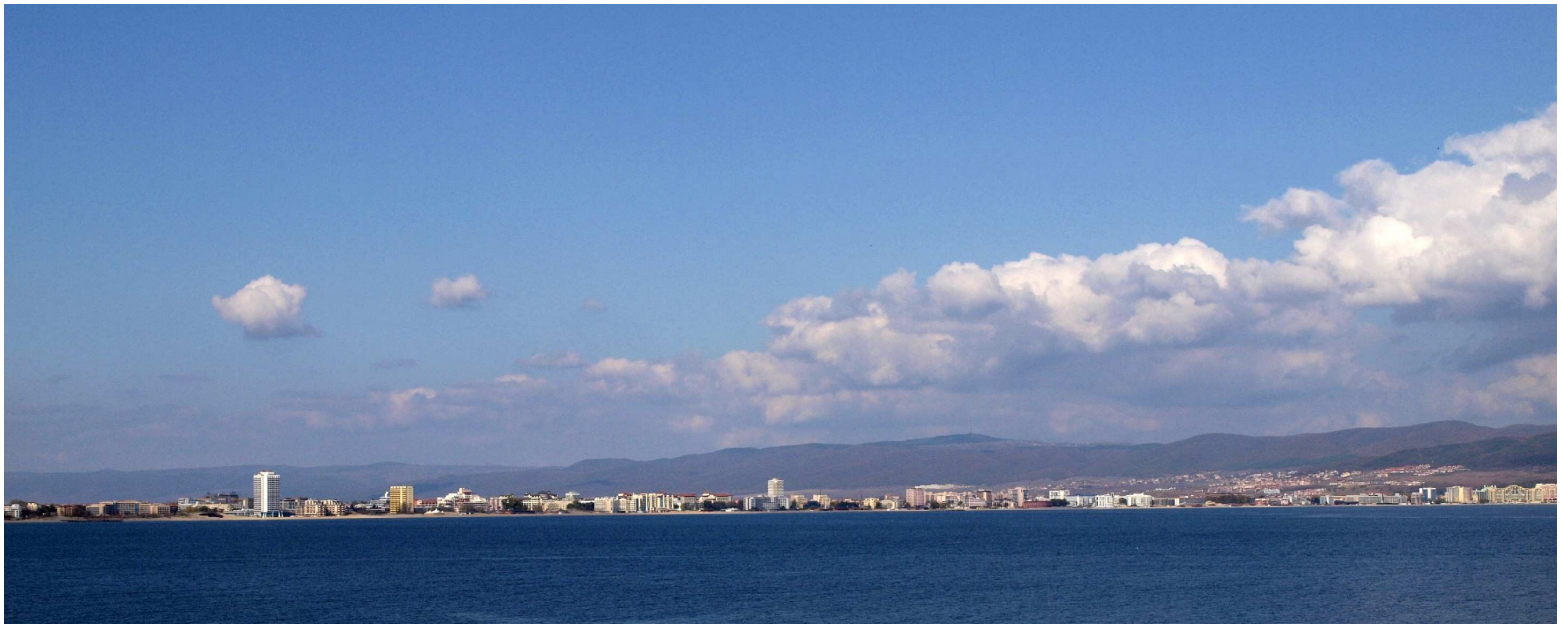
銅細工ピアス。

土産とは云っても、これをピアスとして使うような友人知己はまるでいない。最初から考えていたのは装身具としてではなく、何かの飾りに転用できないかと期待したためだ。

銅板を基材にして、錫鍍金や彩色とカットによる細工は、以前イスタンブルで度々見かけた装飾皿などと同じ手法だ。ブルガリアはトルコの影響を大きく受けているからその名残か、今も隣国なのであちらから仕入れてきたのかもしれない。

記録し忘れたため値段は不明だが、4組もはっきりした当てのないままに買ったのだから500円以下だったと思う。

支払いしながらオヤジにブルガリア語の謝辞を教えて貰う。「ブラゴダリャ（благодаря）」と云ってから、「メルシー」でも良いと付け加えた。ブラゴダリャは英ガイドにも紹介されていたものの身につかなかったので、以後はメルシーで済ますことにした。



サニービーチ遠望。

語学が不得手なのは生来のものだけれど、それでも以前は謝辞ぐらいならばすぐに覚えて使うことができたのに、老いぼれるのは情けないことだ。

聖ソフィア教会から北へ行くと、すぐのところに聖ボルゴロディツァ教会がある。旧市街で唯一の現役教会なので覗いてみたが、異教徒が見る対象として面白味はなく、おまけに撮影禁止だったので直ちに踵を返す。

教会のすぐ北側が島の外周道路で、湾を挟んで対岸にサニービーチが見える。カフェがありドアは開いていたが無人だった。入って声を掛けたら奥からオバサンが出てくる。この時期では客が来ることも稀らしく、「居住しているから、駄目元で開店」みたいな感じだ。それでもカプチーノは飲ませてくれた。1杯が2.5Lv(137円)。

一休みの後、海沿いの道を辿る。6世紀築のバジリカ聖母エレウサの遺跡は1920年に考古学者により再発見されるまで、完全に忘れ去られていたらしい。しかしレンガの床と復元されたらしいアーチを見ることができるだけで、つまらなかった。

ちなみに、「バジリカ聖母エレウサ」と云う表現は、ブルガリア・オフィシャル観光サイトに倣ったものだが、「聖母エレウサ」は聞き慣れない名称だと思う。これはБогородица Елеуса(ボルゴロディツァ　エレウサ)をそのまま訳すとそうなるらしい。しかしこのエレウサのもとはギリシア語: Ἐλεούσα,(『優しさ』『憐れみをあらわす』の意味)なので、「慈しみの聖母教会」ぐらいが妥当に思われる。

日ガイドでは、「聖エレウサ教会」としているが、これは誤りだ。そんな聖人(女)はいない。遺跡そばの案内板にはVirgne Merciful と訳されていたが、これもそれぞれの単語で考えると間違いそうだ。

バシリカ聖母から海沿いを東へ行くと間もなく島の東端に達した。40段ほど石段を下って浜へ。砂や砂利ではなく、貝殻もしくはその破片で埋め尽くされていた。

桟橋があったので先端まで行ってみる。二階の四面がガ

上:砂利の代わりに貝殻を使用したコンクリート。桟橋に使われていた。下:上の桟橋先端には休業中の展望レストラン。

上左：合計三回昼食を摂ったタングラのテラス席。
下左：ショプスカサラダ。
上中：シュリンプカクテル。
下中：串焼きカフカス風。
上右：チーズ。
下右：カプチーノ。

ラス窓になった展望レストラン風の建物があったが、人の気配はないばかりか、長期使用されていないようだ。秋口から春までは休みなのだろう。

振り返ると海岸段丘（？）の上に、昨日食事したレストラン・タングラの屋根が見えた。時計を見るとそろそろ12時だ。もう少し辺りを散歩してから、別の階段を登って丘の上に出た。目の前にタングラがあり、テラス席はまだ無人だった。

居心地の良さそうな席を選んで坐っていると、昨日と同じオヤジがお品書きを持って現れた。昨日の今日だから顔を覚えていたのか、僅かながらも親しみの増した笑みが浮かぶ。

タングラで眺めの良さそうなところに席を占める。

ともかく昨日奨められたシャルドネ・ワインだけ1本頼み、じっくりお品書きを検討する。比較的高価なことから長いこと敬遠してきたオードブル的なものから二品。何しろブルガリアは、シュリンプカクテルが6.5Lv(357円)、チーズ一皿は4Lv(220円)なのだ。さらにショプスカサラダと、後はどんなものが出てくるのか判らないまま、串焼きカフカス風を注文した。

シュリンプカクテルはパフェグラスを使用し、チョコレートパフェを彷彿させるようにガラス面から二種類のソースが縞模様を形作り、中に小海老が入っていた。トーストが添えられている。

チーズは芸がなく、僅かに黄色みを帯びた軟質のものが一種類並んでいるだけだった。しかし量的にはたっぷりある。シュリンプカクテルにしてもパフェグラスにぎっちり入り、おまけにトースト付きだから、この二品で軽い昼食になってしまいそうだ。

チーズは適当に持ち帰ることにして、皿が空にならなくても次の料理を運んで貰うことにした。

タングラ付近のメセンブリア通り(？)。

ハンプ(hump)あるいはスリーピングポリスマンと呼ばれる車輌強制徐行を目的とした路面の膨らみ。ヨーロッパではごく一般的に見受けられるが、日本にはほとんどない。

ショプスカサラダのボリュームはこれまでの経験から想像していた通りだった。そしていよいよメインの串焼きカフカス風が運ばれてきた。牛肉塊の間に野菜(ピーマン、タマネギ、茄子、パプリカ、マッシュルームなど)を挟んで、鉄串で刺したものが2本並んでいる。

肉塊は一つが50グラム以上ありそうだ。鉄串を引き抜いて肉をナイフで両断する。ジュワッと肉汁が溢れ、切断面の真ん中付近はピンク色が残っていた。予想を上回る料理の登場にほくそ笑みつつ口に運ぶ。焼き加減も調味料の塩梅も申し分なかった。後はひたすら食べるだけだ。

結局スタートから1時間近く掛けて、シュリンプカクテル、ショプスカサラダ、串焼きカフカス風、ワイン1本の全てを平らげる。オヤジが通りかかったので、食後のカプチーノを注文し、3片食べただけのチーズを持ち帰られるように簡易包装して貰った。

勘定はシュリンプカクテル6.5Lv(357円)、チーズ4Lv(220円)、ショプスカサラダ4.5Lv(247円)、串焼きカフカス風10Lv(549円)、ワイン14Lv(769円)、サービス料4.1Lv(225円)で、合計45.1Lv(2,477円)だった。

文字通り漫ろ歩いて、しかし寄り道もせずに宿へ戻った。フロントで滞在を三泊に延長できるか訊くと、ガラガラに空いている状態だし、問題なく応じてくれた。これでネセバル探訪にもう一日掛けることになったので、ゆっくり午睡した後も、読書など部屋でのんびり過ごした。

4時を廻ってインターネットカフェへ出かける。旧市街への道すがら見かけたカフェで、どのような状況なのか実際使用してみたかった。

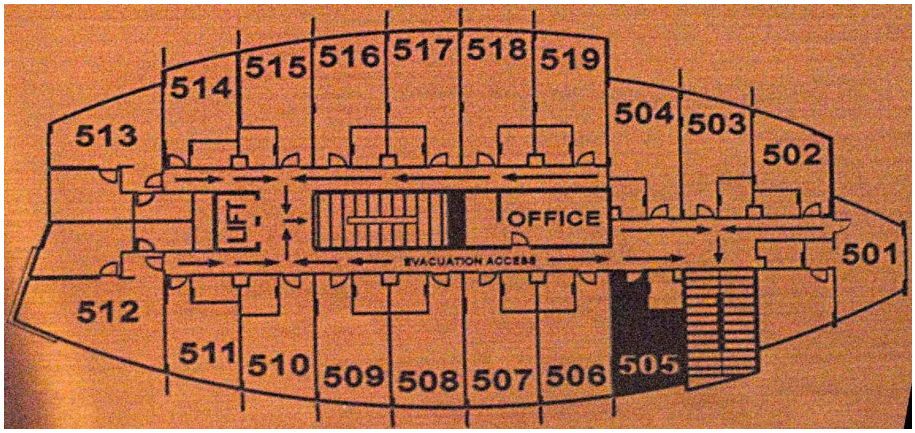
内部は半分ほどが単なるカフェで、地元のオヤジ達がカードゲームをしている。残りのスペースにPCが6台ほど置かれていて、こちらの利用者はいなかった。

公衆電話利用のボッタクリ

2005年のシチリア旅行中、左のようなステッカーが公衆電話に貼られているのを見て、電話会社のサービスと思って数回利用した。帰国後にカード利用の請求が来て驚いた。約二万円のボッタクリ料金なのだ。

カード会社に不当請求だと抗議したところ、紆余曲折はあったものの、数ヶ月後に請求は(減額ではなく)取り下げられ、結果的にただで国際電話をかけられた。

今回ブルガリアで、よく似たステッカーをネセバルを始め数回見かけた。もちろん、「柳の下の泥鰌．．．」など期待しない。君子危うきに近寄らずだ。



宿の5階平面図。塗りつぶされている505が利用した部屋。

手近なPCでまず日本語表示ができるか確かめた。半ば予想通り文字化けする。カフェの人間にこのことを話すと、予想外だったが管理スペースのデスク引き出しからCDを取り出し、外国語表示関係のインストールを開始した。

数分で作業を完了し、試してみるよう云われ、漢字表示に何らの問題もなかった。店のレベルを見直す。しかし日本語入力はできない。セキュリティ設定のような気もするが、確信はないし、英語が通じないので(ひょっとすると通じても)問題を上手く説明できないから、解決などまるで期待できない。

諦めてメールを読んだ後は、今度の旅に関する情報収集に利用した。1時間ほど使用して料金は0.8Lv(44円)と、只みたいな金額だ。PCの値段がブルガリアにおいて格安とは考えられないし、場所代と人件費が安いせいなのだろうか。

ネットカフェを出て、ホテル向かいの昨日も利用した八百屋で、今度は投げ売りではないトマトを買う。二個をデジタル秤に乗せると、料金の0.63Lv(35円)が表示された。しかし旅行中0.01Lv(1円)硬貨はついに一度もお目にかからなかった。この時も切り捨てで支払ったのは0.6Lv(33円)だった。

ROOM SERVICE
From 8:00 h. to 23:00 h.
on № 709 – restaurant
MARIETA PALACE
++++
Drinks at your choice
Italian salat ..... 3.50 lv.
Shopska salat ..... 3.50 lv.
Salat "Health" /carrots, beetroot / ..... 2.80 lv.
Plateau cheese „Surprise" ..... 24.00 lv.
(4 kind cheese, raisin, fruits)
Wolf's platter ..... 18.60 lv.
Breaded cheese ..... 5.20 lv.
Hamendeggs ..... 2.50 lv.
Chicken fillet (fried, grill) ..... 6.50 lv.
Pork fillet (fried, grill) ..... 8.00 lv.
Veal fillet fried ..... 18.00 lv.
Breaded yellow cheese ..... 5.80 lv.
French fries ..... 2.50 lv.
Pancake (chicken, yellow cheese) ..... 6.50 lv.
Spaghetti ..... 4.00 lv.
Sandwich:
– with yellow cheese ..... 2.50 lv.
– with ham and yellow cheese ..... 3.00 lv.
– with flat sausage and yellow cheese ..... 3.50 lv.
Sweet pancake ..... 1.80 lv.
/+10 % for room service/

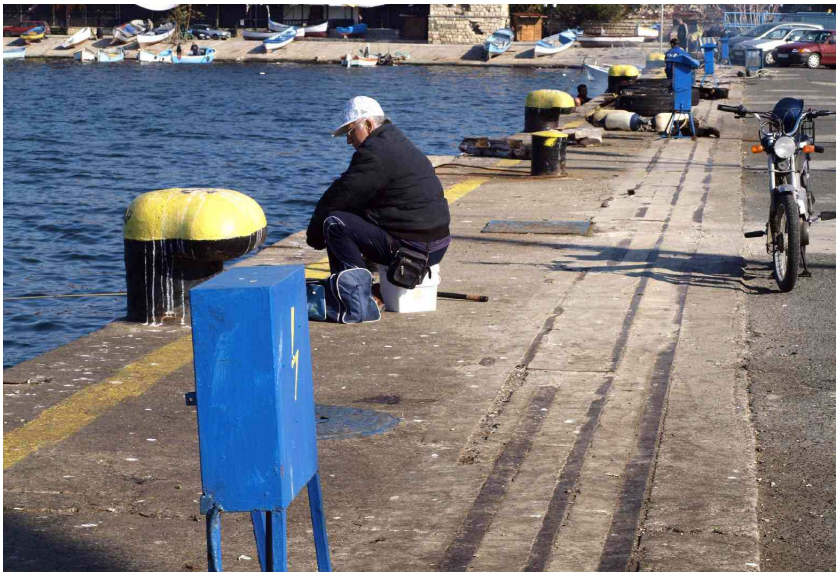
宿のルームサービスメニュー。ショプスカサラダが3.5Lv(192円)など安価だ。

旧市街探訪(3)

四つ星ホテルにしては冴えない朝食を、8時に早々済ませた。何しろ日頃から早く寝る習慣で、旅先でも同様にしているから、ゆっくり眠るつもりでも6時には目覚めてしまう。読書で時を過ごしたりするが、8時頃には間が持たなくなってしまうのだ。

朝食後もぐずぐず部屋で過ごす。何しろ行く先は旧市街しかないけれど、狭いところを既に二回も歩いているから、見物はせいぜい2時間ぐらいで食事にしたい。逆算して10時を廻ってから出かけた。

地峡を渡り島部に入る。まだ足を踏み入れていないところと云うことで、南側にある突堤を見に行った。小型船が20艘くらい舫ってある。手漕ぎかせいぜい小型の船外機を装備した程度だ。本格的ではないが、それでも分類するならば漁船だろう。



土曜日のせいかそこそこ釣り人が多かった。一定間隔で並んでいる、青い箱は電源供給装置。シーズン中ならばヨットが停泊して、この箱から電源が供給されるのだろう。

聖ヨハネ・アリトゥルゲトゥス教会。

ブルガリアの民族復興期と建築

まだオスマン帝国の支配下だった19世紀初頭に、ブルガリアの教会、教育、文化が目覚しい発展を見せこの辺りを復興期の始まりとみなすらしい。

民族意識の高まりは、次第にオスマン帝国に対する独立運動に発展し、1873年には運動の指導者レフスキの処刑や1876年の四月蜂起とそれに対するオスマン帝国の徹底弾圧などの悲劇に繋がる。

しかしこの間にも民族復興期の代表的建築とされる民族博物館は1847年、ゲオルギアディ・ハウスは48年、両方ともプロヴディフに建築されている。

そんなことで漁師らしい人影も、水揚げされた魚も見当たらない。土曜日のせいなのか、釣り人の姿はそこそこいたので、しばらく見物した。しかしさっぱり獲物が上がらないので、元々釣り好きでもないからすぐ飽きてしまった。

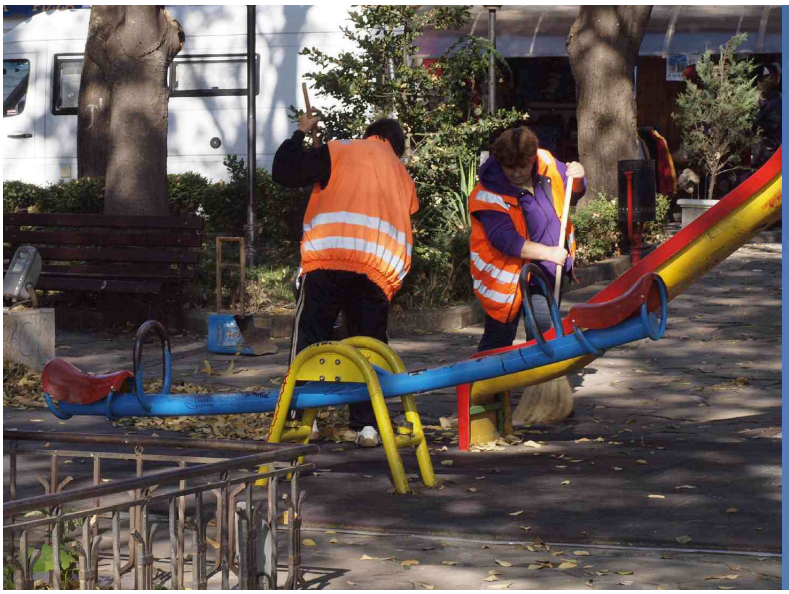
埠頭の東側に隣接して、昨日も訪れた聖ヨハネ・アリトゥルゲトゥス教会がある。廃墟になっていても、旧市街にある中世教会の中でもっとも美しい一つであり、その外壁は再見の価値がある。しかし幅が10メートル、奥行き18.5メートルと小規模なのでしばらく眺めればそれで充分だ。

この街の観光資源は、紀元前に遡るトラキア人やギリシャ人の遺跡(顕著なものは西門だが、その他はほとんど水没したりしてみることができない)と中世教会(遺跡)、そして民族復興期の住宅群だろう。しかし19世紀に建造された住宅ならば広い意味で全て「民族復興期の住宅」で括られてしまうが、この街に残るものの特徴は型式が黒海沿岸に多く見られるもので、かつほとんどが庶民の住宅であることだ。

1階は石積みで倉庫や作業場として使用され、木造の2階が居住部分となっている。この地域がオスマン支配下になってから、都市としては寂れてしまい、復興期に住んでいたのは大部分が漁師だったようだ。

現在の住人が何を生業としているのか不明だけれど、ともかくほとんどの住居が現在も生活の場となっている。プロヴディフなどで復興期に建造された高級住宅が、今ではほとんど博物館などになっているのとは対称的だった。

民族復興期の住宅。どの家も外周の板張りは鎧下見張り(鎧_下見_張り)だ。



左：公園の清掃作業。ブルガリアでは公園や道路など、公共的な場所を人力で清掃する姿を頻繁に見かける。右：時計塔の屋根は居心地がよいのか鳩が押し合うように群れていた。

上左：ムール貝。
下左：（ラムの）ランプステーキ。
上右：アンチョビー。
ランプステーキ断面。

前にも書いた通り旧市街は細い路地が錯綜し、ちょっとした迷路的雰囲気を味わえる。それでも幅250メートル、奥行き300メートル程度のごく狭いところなので、道を失う恐れはない。既に二回訪れているので、初めての路地を選んで辿って行くと、思わぬところで見覚えのある場所に出たりする。次第に自分のテリトリーが拡大して行くような感覚を楽しんだ。

狭い範囲なのに結局1時間半も歩き廻っていた。とうとう全ての通りを1回以上通過し、時分どきになったこともあり路地歩きを切り上げる。指呼の間にタングラがあり、三回目の食事に訪れた。店の気心も知れてきたので、スタッフの案内も待たずに空いていた昨日の席に坐る。

この日選んだのは前菜的なものとしてムール貝とアンチョビー、ガーリックトースト。メインに（ラムの）ランプステーキのタマネギ添え（Rumpsteak with onion）だった。ワインはブルガリア産カベルネ・ソーヴィニヨン（赤）を1本。

ムール貝はお品書きに Musseles with wine and basil と記されていたので、ワイン蒸し的なものを想像していた。出されたものはちょっと感じが違うもので、貝殻は外されている。オリーブ油も使用されているようだったが、肥った身がプリプリして美味い。

アンチョビーは予想外の生ものだった。かつてオリーブオイル漬けのものしか食したことがないのだけれど、生が食べられるならばそれに越したことはないのかもしれない。しかしムール貝とアンチョビーを合わせた量は、前菜としては多過ぎるので、昨日同様に半分くらいは持ち帰ることにする。

メインのランプステーキは予想外のだめ押しになった。どのように調理されたのか想像してみ

ホテルのバスマット。

ると、ラムの尻肉に薄い衣を着けて油で焼き、タマネギの炒めたものを乗せて改めてオーブンで焼いたような感じだ。不味くはなかったものの、もう一度食べてみたいとは思わない。

この日は土曜日だったせいか、食事に立ち寄る客や、脇を通りすぎる人が前日などより多い。しかしそれでも雑踏などとはほど遠い状態なので、寛いで食事できることに変わりはなかった。むしろ西瓜に振りかけた塩が甘味を引き立てるように、長閑さをより実感できたかもしれない。1時間以上掛けて食事を堪能し、最後にコーヒーで締める。

勘定はムール貝4.5Lv(247円)、アンチョビー5.5Lv(302円)、ガーリックトースト0.5Lv(27円)、ランプステーキ9.9Lv(544円)、赤ワイン14Lv(769円)。サービス料が10%加算されたが、三日連続できて、何となく親しみを感じていたので、心中で別れを告げながら、10Lv(549円)チップを置いた。ちょうど客が途切れていたこともあったのか、勘定が済むとオヤジはノートを持って席に来ると、日本語の接客用語を何か教えてくれと云う。ごく基本的なのであれば知っているだろうから、「ドウゾ、ゴユックリ。」を怪しげな英語解説と共に伝えた。

宿へ戻ってしばし午睡を取った後、明日行こうと思っているヴァルナに備えるためフロントへ降りた。まず英文ガイドで目星を付けた宿の予約を頼み、これはブルガスと異なり最初のところであっさり決まった。ネセバルのような観光地ではないため、逆にシーズンオフ休業もないようだ。

次にバスの乗り場を訊いた。旧市街外れが始発点であることは一昨日確認したが、ブルガスからのバスがこのすぐそばで停車したように、ヴァルナ行きも付近に停留所があるはずだ。ところが思わぬ答えが返ってきた。ヴァルナ直行バスはシーズン中のみの運行で、今の時期はサニービーチで乗り換えなければならない。

始発点ではないバス停で待つのも不安が多く嫌だったのに、乗り換えが必要と聞いてタクシー利用を考える。おおよその料金を尋ねると、タクシー会社に電話して100Lv(5,492円)くらいと教えてくれた。これならば快適さや安心感から支払う価値は充分あるし、「取材」と云う意味でも利用してみたい。

5. ヴァルナ(Варна)

タクシー

11月6日は曇天であったものの、取り敢えず降りそうな様子はなかった。10時にチェックアウトし、3泊の料金180Lv(9,885円)をカードで支払う。次いでタクシーを呼んで貰った。5分ぐらいで来ると云われる。

しかし実際には20分近く待たされる。ようやく

ヴァルナまで利用したタクシー。車はダチア・ダスター。